

保育者養成におけるピアノ教育

—伴奏力の発達を目的として—

杉 山 知 子

序

保育者養成のための音楽教育については、各養成校でそれぞれの方針に従い、また、現場からの要求にこたえるべく、様々なカリキュラム編成や指導法がうち出されている。その中でピアノ教育についてみると、まず教則本は、バイエル、メトードローズをはじめとして、いろいろな種類のものが用いられているが、保育者に要求されるピアノ演奏能力を身につけさせるという点で、予期した効果を上げにくいという問題点もある。この保育者に要求されるピアノ演奏能力は広範囲にわたるものであるが、その中で“幼児歌曲の伴奏を楽譜を見てでも弾けるし、あるいは見なくても自由につけられる”ということが基本の1つと考えられる。

さて筆者は、過去2年間本学幼児教育学科学生のパiano伴奏力について研究したが、その結果、教則本でのピアノ演奏力と、幼児歌曲の伴奏力が対応していないことが明らかとなった。このことは即ち、教育効果が上がっていないことの証明であり、ピアノ教育に関して、教材・指導法の両面からの再考の必要があると思われる。さらに言えば、保育者に要求される伴奏力を2年間で十分修得できるような教育法をうち出す必要があるということである。

この点アメリカでは成人用、特に保育者や小学校教師のためのピアノ教育の研究が盛んに行なわれており、その主なものとしては下記のようなものが出版されている。

- Beginner's Book for Older Pupils (1929) Ernest Schelling 他著
- The Adult Preparatory Book (1943) John Thompson 著
- Adult Piano Course 1～3 (1946) John W. Schaum 著
- Adult Piano Course, Book 1・2 (1952) Michael Aaron 著
- The Older Student 1～3 (1956～58) Ada Richter 著
- Music for Piano for the Older Beginner (1967) Robert Pace 著
- Beginning Piano for Adults (1968) J.S.Bastien, James Bastien 著
- Piano for Adults, Book 1・2 (1969) Mark Nevin 著
- Adult Piano Student, Level 1～3 (1970) David Carr Glover 著

これらの中で今回は、日本において近年しきりに取りあげられ、また講演及び講習のためにたびたび来日してピアノ教育界に大きな刺激を与えているバスティエン夫妻の『Beginning Piano

for Adults』をとりあげ、その指導法について研究し、ピアノ教育を考える一助としたい。


I 伴奏力に関する現状の問題点

過去2年間の研究「幼児歌曲の伴奏に関する一考察」(1)(2)より次の事柄が問題点として考えられる。

①ピアノ学習開始時期は高校生時代が93%と圧倒的に多く、しかも高校3年、2年、1年の順に多くなっている。このことは、大部分の学生はピアノ学習の経験が浅いということであり、2年間で保育に役立つピアノ演奏力を修得する方法を考慮する必要がある。

②本学1・2年生の用いている教材(教本)は次表の通りである。

	バイエル	ブルグ	ソナチネ	ソナタ
1年生	約1割	5～6割	2～3割	約1割
2年生	0	2～3割	6～7割	約1割

伴奏形  は、上の表から1年生約9割、2年生全員がマスターしているものである。これを左手、歌のメロディーを右手で弾かせた場合、よく弾けるのは1年生32%、2年生44%であった。また同じ調査で、よく弾ける割合を教本別に分析した場合や、2年生における1年間の進歩をピアノ教本と伴奏力の両面からみた場合、教本と伴奏力の両者間の関係が密接でない。つまり、教本の内容より伴奏力の方が下回っているのである。このことは、ピアノ教本による伴奏力養成のための教育効果が上がっていないことを示すものと考えられる。

③伴奏する場合、その曲を知っているか、知らないかが、弾ける、弾けないに大きく影響し、どの教本の学生とも知っている場合の方が知らない場合より、高い割合で弾けている。

このことは、弾けるということが楽譜を鍵盤に移すための単なる機械的練習だけによるものではないことを表わしている。

以上の点から、保育者養成におけるピアノ教育は、ピアノ演奏家を目指す者の教育と同様のアプローチによるのではなく、保育の現場で役立つような、独自のものをうち立てる必要があると思われる。

その教育法の内容としては、ただ弾くことのみ、即ち楽譜を鍵盤に移すことのみで終始するのではなく、もっと幅広く総合的な音楽性の陶冶を目指したもので、応用力を養うようなものが考えられる。このように総合的という見地から『Beginning Piano for Adults』がどのような指導法によっているかをみることにより、保育者養成におけるピアノ教育を考える上での1つの問題提起にしたい。

II 『Beginning Piano for Adults』の紹介

バスティエンは“Music through the Piano”ということ、つまりピアノを「弾く」だけでなく、「読む」「聴く」「創る」「移動する」などピアノを通して音楽の重要な面を総合的に

学習するということを根本理念としている。『Beginning Piano for Adults』はこの根本理念に基づいて計画された成人のピアノ入門教則本である。

内容の構成は次のようであり、全課程を2年間で終了するようになっている。

- | | |
|---|--|
| { | 第1部……………Pre－reading（読譜のまえに） |
| | 单元1～6 |
| | 第2部……………Reading（読譜） |
| | 单元7～13 |
| { | 第3部……………Functional Piano（機能的ピアノ、つまり実用的なピアノ学習） |
| | 单元14, 15 |
| { | 第4部……………Piano Literature, Technique and Style（ピアノ曲集、技術と様式） |

また、音楽の個々の要素であるリズム・和音・拍子・調子などは個別的に学習するのではなく、有機的なつながりをもって学習するように工夫がこらしてある。

その教材については、童謡・民謡・讃美歌・ポピュラー曲、大作曲家のピアノ曲や交響曲などの一部というように、種類の上で、また地理的、歴史的にも広範囲にわたっている。しかも、それらがバスティエンの教育理念に基づいて選択・配列されている。そして、それら教材を弾く際の指導順序は常に一貫して、

1. 両手の鍵盤上のポジションを見つけなさい。
2. 本を見て弾きなさい。
3. 指番号を声を出して言いながら弾きなさい。
4. 次に声を出して数を数えながら弾きなさい。

という指示がなされる。

指導法は総合的なシステムを用いており、その内容については次に触れる。

Ⅲ 総合的教育の見地からみた『Beginning Piano for Adults』の内容

第1部 Pre－reading を中心として内容をみることにする。

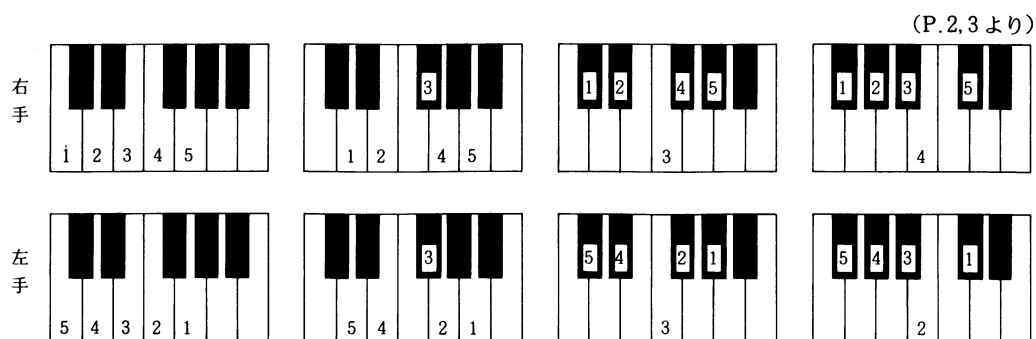
A. 鍵盤上の様々な指の位置で弾く練習

1) 指の位置について

バスティエンは最初に「五指の位置」という勉強からピアノ教育を導入する。「五指の位置」とは、音階の一度から五度の音に各階を対応させ、次の図のように鍵盤上の指の位置を規定したものである。

鍵盤上で指の位置を見つけ、次のように指番号を声を出して言いながら弾く。





五指のポジションの練習のための曲として「メリーさんの羊」や「ホットクロスパン」が用いられる。

Merrily we roll along (メリーさんの羊)

右手

3 2 1 2 3 3 3 2 2 2 3 5 5 3 2 1 2 3 3 3 2 2 3 2 1

Mer-ri-ly we roll a-long, roll a-long, roll a-long, Mer-ri-ly we roll a-long, o'er the deep blue sea.

左手

3 4 5 4 3 3 3 4 4 4 3 1 1 3 4 5 4 3 3 3 4 4 3 4 5

(P.2より)

Hot Cross Buns (ホット クロス パン)

右手

3 2 1 3 2 1 1 1 1 1 2 2 2 2 3 2 1

Hot Cross Buns, Hot Cross Buns, One a pen-ny, Two a pen-ny Hot Cross Buns!

左手

1 2 3 1 2 3 3 3 3 3 2 2 2 2 1 2 3

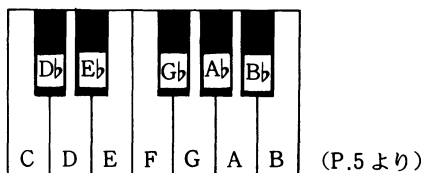
記譜 Hot Cross Buns

(P.7より)

2) 全調システム

バスティエンはあらゆる調で弾く教育を行う。そのやり方は、12の全長調を指の位置によってグループに分け、各グループごとに学習するという方法である。

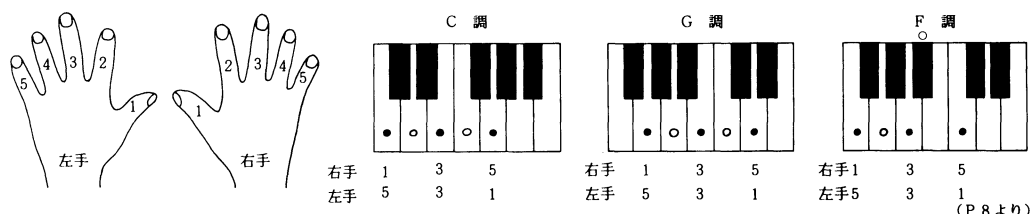
調名は、右手1の指が、左手は5の指が弾く鍵盤の音名を用い、C調とかDフラット調（D♭調と記す）というように表わす。鍵盤の音名は英語読みで次のようである。



a) グループ 1

鍵盤に五指を置いた場合（右手1・3・5、左手5・3・1）の指のポジションがすべて白鍵となるものを、グループ1とする。これにはC調・G調・F調が含まれる。

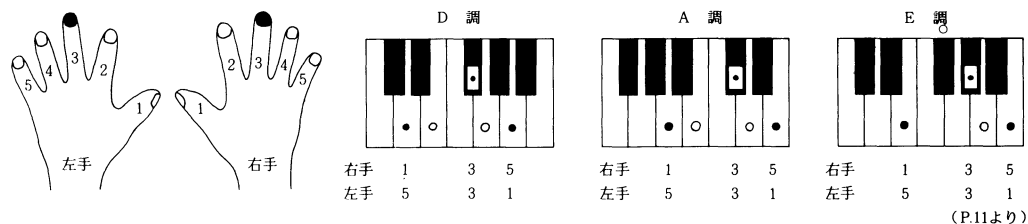
次の図で●は右左手の1・3・5指の位置を、○は2・4指の位置を示す。



b) グループ 2

鍵盤に五指を置いた場合、（右手1・3・5、左手5・3・1）の指のポジションで両手の3指が黒盤で、1・5指が白鍵となるものを、グループ2とする。これにはD調・A調・E調が含まれる。

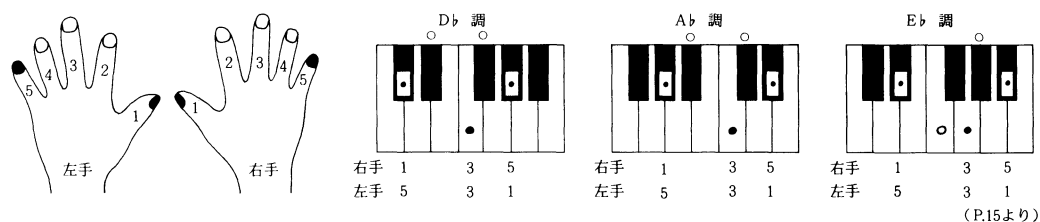
次の図で●は右左手の1・3・5指の位置を、○は2・4指の位置を示す。



c) グループ 3

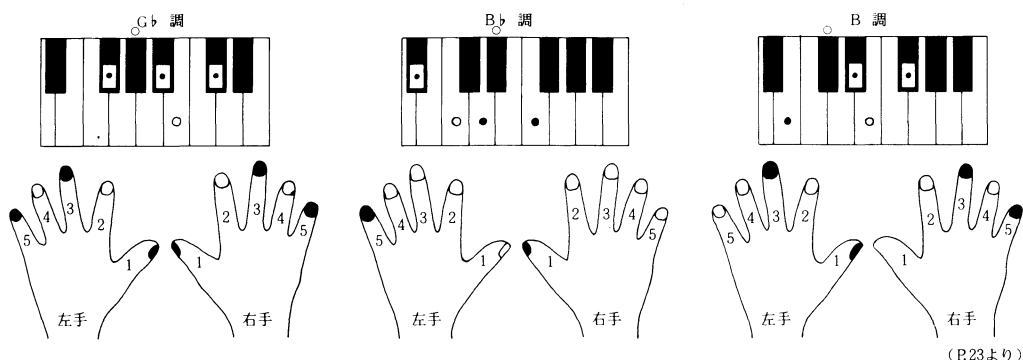
鍵盤に五指を置いた場合、（右手1・3・5、左手5・3・1）の指のポジションで、両手の3指が白鍵で、1・5指が黒鍵となるものをグループ3とする。これにはD♭調・A♭調・E♭調が含まれる。

次の図で●は右左手の1・3・5指の位置を、○は2・4指の位置を示す。



d) グループ 4

これには全12調のうちグループ1・2・3に含まれなかったG♭調・B♭調・B調が含まれる。この3つの調は(右手1:3:5 / 左手5:3:1)の指のポジションにおける互いの共通点をもたないもので次の図のようである。図において・は右左手の1・3・5指の位置、○は2・4指の位置を示す。



このようにグループに分け、各グループごとに弾く練習をする。練習方法は、たとえばグループ1では次のように五線譜なしの譜が示される。そして「ポジション：C調」というような、右手1，左手5の指の鍵盤上の位置に従って五指を置き、指番号を言いながら弾くのである。五線譜なしの譜のあとには、本来の記譜も示される。

(i) ポジション：C調（移調：G・F調）

(P.10より)



(ii) ポジション：G調（移調：F・C調）



(iii) ポジション：F調（移調：C・G調）



記譜

(i)

(ii)

(iii)

(P.10より)

1) 教材の歌唱と和音伴奏

• The Farmer in the Dell (P.4より)

• Are You Sleeping ? (P.9より)

The Farmer in the Dell (P.4より)

Are You Sleeping ? (P.9 より)

—71—

2) 和音によるリズム打ち

リズム練習をする際に和音を弾くという方法を用いており、I のコードを学習した段階ではIで、またV₇のコードを学習した段階ではIとV₇を用いて、それらを弾く練習とリズム練習を兼ね合わせている。

I のコードを用いたリズム練習は次のようにしている。

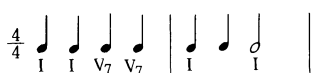
- 次のリズム練習をIのコードを用いて、片手ずつ行ないなさい。
- 弾きながら声を出して数を数えなさい。
- 鍵盤を見ないで弾きなさい。
- はじめの二つはアンサンブルの練習として、二人で弾いてみなさい。



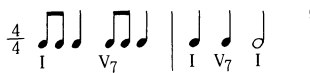
(P.12より)

またIとV₇のコードを用いた練習は次のようなものである。

1. F 調, 右手



2. D 調, 右手



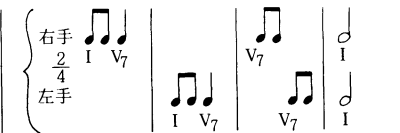
3. D♭ 調, 右手



5. A♭ 調



7. E♭ 調



(練習の4.と6.は省略。)
P.27より

C. 移調

バスティエンは移調を重視しており、学習の最初から移調することがとり入れられている。

その方法はまず、全12調の同一グループ内で行なわれ、これはA, 2) 全調システムの練習法で紹介したように、五線譜なしで指の位置を鍵盤上で変えることによって行なわれる。また次の例のように、学習が進むに従ってグループを越えた移調やコードと共の練習法をとる。

記譜 (i) (ii)

(i) ポジション：グループ 2 からどれか (移調：他の 8 つの調子すべて)

右手 (メロディー) 4/4 1 2 3 4 5 5 4 3 2 1

左手 (コード) I I I I

(ii) ポジション：グループ 1 からどれか (移調：他の 8 つの調子すべて)

右手 (コード) I I I I

左手 (メロディー) 4/4 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5

(P.19より)

記譜 • Drink to me only with thine eyes

• Drink to me only with thine eyes (抜粋)

ポジション：C 調 (移調：D, D \flat 調)

イギリスのフォークソング

右手 3 3 3 4 4 5 4 3 2 3 4 5 1 4 3 2 1

左手 6/8 3 3 3 2 2 1 2 3 4 3 2 1 5 2 3 4 5

(P.17より)

五線譜の記譜による移調は第 2 部で示される。第 2 部では「ちょうちょう」や「メリーさんの羊」など曲の移調のほか、次のようなモチーフによる練習が行なわれる。

(i)

C 調 1 5 D♭ 調 1 5

(ii) 半音階ずつ上行してすべての調に移調しない。

C 調 D♭ 調

1 4 1 4

(P.44より)

このように移調を教える上で、最初から五線譜を用いるのではなく“鍵盤上の指の位置を変える”ということから導入し、指が鍵盤に十分慣れてから五線譜での移調練習にはいつている。

ま と め

『Beginning Piano for Adults』について総合的教育の立場から、その具体的な指導法を第1部 Pre-reading を中心にみてきた。

第1部では五線譜を用いず、指番号と鍵盤上の指の位置を示すという方法により、読譜なしで指の機能訓練を行なっている。楽譜を見てピアノを弾くことには、譜を読む(読譜)という知的活動と、指を動かすという身体的活動の二つが考えられ、それらが結びついて成立するものである。バスティエンはピアノ学習の最初から、この二つの活動を結びつけて弾かせるのではなく、指の機能訓練だけをまず初めに行なっている。そして五指の動きの訓練ができ、鍵盤上の様々な位置で弾くことに慣れてから、読譜と結びつけた学習にしているのである。

また伴奏の基本となる和音を初めから導入して、和音を弾くことと同時に、ハーモニーの響きに耳を傾ける訓練を学習の初めから行なっている。この聴くということは音楽活動の基本であり、すべての音楽的能力の発達はこの聴くということからはじまっている。

そして伴奏の場合には、ことさら聴くということが大切なことであると考えられる。

『Beginning Piano for Adults』の第2・3・4部についてはその内容について別の機会に触れたい。

参 考 文 献

James W. Bastien 著 How to Teach Piano Successfully General Words and Music Co.
1973 年

季刊音楽教育研究	1979年 No. 21	音楽之友社
〃	1980年 No. 24	〃
ムジカノーヴァ	1977年 Vol. 80	ムジカノーヴァ社
溝上日出夫著	保育に生かすピアノレッスン	フレーベル館 昭和 53 年
市田儀一郎著	ピアノ伴奏の基本と奏法	明治図書出版 1976 年
東京家政大学研究紀要	第 19 集	
長崎県立女子短期大学研究紀要	第 25 号	
〃	〃 第 27 号	
美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要	第 24 号	
〃	〃 第 25 号	